

「マスコミのバカ騒ぎ」

小保方晴子さんが、将来、人間の万能細胞の簡易な作成に道を切り開くかもしれない、大きな発見をした（STAP細胞）。

二〇一四年一月三十一日発表。発表時の年齢は三〇歳という若さの、なかなか魅力的な女性である。彼女の功績は日本人として大変誇らしく思うし、今後、研究がいつそう進展することを心から祈りたい。これは、ごく良識的な国民が抱く、当たり前の気持ちであろう。

ところがである。発表後のマスコミのバカ騒ぎ振りは一切何なのだ。まさに、「開いた口が塞がらない」どころか、「開いた口がなお開く」といった状態である。親戚、友達、同僚などを巻き込んで、彼女の小・中学校時代のエピソードや作文、卒業アルバムなどを紹介したかと思えば、挙句の果ては、ファッションのことにまで、こと細かに言及して大騒ぎしている。まるで芸能番組ではないかと錯覚するほどだ。本当に、日本のマスコミはレベルが低い。彼女の思いもかけぬ災難に同情し、研究生活に支障をきたさなければよいがと心配していたところ、やはりそれが現実になってしまったようだ。同様な出来事のたびにマスコミが繰り返す、応援とは名ばかりの、妨害活動である。

しかし、彼女の賢さは、次のような形になって発揮され、これには、思わず快哉を叫んでしまった。それは、「報道関係者の皆様」に宛てられた、「お願い」（二〇一四年一月三十一日）であ

り、次のように記してある。

一、研究発表に関する記者会見以降、研究成果に関係のない報道が一人歩きしてしまい、研究活動に支障がでている。

二、本人や家族のプライバシーに関わる取材が過熱し、世話になってきた知人・友人をはじめ、近隣の人にもまで、迷惑が及んでいる。

三、真実でない報道もあり、その対応に翻弄され、研究を遂行することが、困難な状況にある。

四、報道関係者は、STAP細胞研究の今後の発展にとって、非常に大事な時期であることを、理解して欲しい。

マスコミ各社が、周りの迷惑など一切考慮せず、傍若無人の態度で取材している様子が、目に浮かぶようである。そしてこの「お願い」は、文面こそ丁寧ではあるが、言うべきことはハッキリと書いてある。彼女の手際よい対応に拍手をしたい。

それとともに、一人の若い女性から、ここまで噛んで呑み込むような形で説教されなければならないような、程度の低い日本のマスコミを睥睨し、猛省を促したい。報道関係者諸君、これは、君達の知的レベルがオソマツ極まりないことを自覚、猛省して、少しでもまともになるよう、真剣に努力しなければいけない、という警告でもあるのだ。

（二〇一四年二月四日）